

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第120号 2024年12月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 学習指導要領改訂と大学入学共通テスト:情報科をめぐって	吉野 剛弘	2
新入生への穂積重行文学部長のエール — 『大東文化』第365号(1985年4月)の掲載記事から —	谷本 宗生	8
大正時代の女子高等教育(69) 同志社大学女子学生の受け入れ	長本 裕子	10
子どもたちと考える校則⑰ —なぜ化粧が校則で禁止されているのか—	八田 友和	15
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(9): 『全国学校案内』(明治41年)(1)	吉野 剛弘	19
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(2)	富岡 勝	25
刊行要項(2015年6月15日現在)		30
短評・文献紹介		31
会員消息		32

コラム
学習指導要領改訂と大学入学共通
テスト:情報科をめぐる

よしの たけひろ
吉野 剛弘
(埼玉学園大学)

2025年の1月に実施される大学入学共通テスト(以下、共通テスト)は、2022年から学年進んで施行されている新たな学習指導要領(以下、新課程)に基づく試験が実施される。刊行時期にもよるが、「される」ではなく、すでに「された」か

もしれない。

新課程の特徴の一つに、必修科目の増加があるが、これにともなって共通テストの科目構成にも変化が生じている。その中でも最も大きな変化は、新たに導入される「情報」であろう。これまでも「数学②」の選択科目の一つに「情報関係基礎」があったが、あくまで選択科目の一つである。教科・科目の組み換えでもなく、完全に新規に、しかも選択の余地のないものとして導入されるのは、共通一次試験以降の歴史を振り返っても、この「情報」(内容は「情報Ⅰ」)が初めてのことである。

しかし、この「情報」の試験は、始まる前から波乱含みである。大学教員らで構成されている「入試改革を考える会」は、2024年11月18日に共通テストに導入する「情報」について、導入延期などを求める反対署名を提出した。反対の理由として、受験生の負担の増加や、高等学校で情報科を教える専任教員が不足している実態があることなどが掲げられている。

新教科として導入されて20年余りが経っているが、情報科の扱いは軽いと言わざるを得ないところがある。「情報Ⅰ」を選択の余地のない必修科目としておきながら、教科設置にあたって臨時に教科外で免許を与えた教員が授業を行っているケースが今でもある。情報科の内容は、設置当初と今とを比べれば隔世の感があるほどに変化している。自分の専門の教科に加えて、情報科のアップデートに対応するのは、決して簡単ではないだろう。

しかも、情報科が導入された2000年代の教員採用試験において、情報科の枠で受験する者には、他の普通教科の免許状を持っていることを求める自治体は少なくなかった。新規採用が抑制されていたということである。情報科の必修修単位数は2単位で、小規模校だと情報科の専任教員の持ちコマは明らかに少なくなるからであろう。しかし、この点は芸術科や家庭科も同じような状況なので、情報科だけの問題ではない。新参者の悲劇と評するしかないような話である。

講習で免許を授与した現任教員もいるので、それほど必要がなかったということだろう。そんなわけで、情報科の免許を出していた前任校では、採用試験対策として数学科の免許も出すことにしたほどである。2010年代に入ると、情報科の免許だけで採用試験の受験が可能な自治体も増えてきた。それが普通の形なのだが、そのツケが今になって回ってきたと言うしかない。

そのツケを払わされるのは、困ったことに受験生である。国立大学では「情報」の点数を合否判定に加味しないというところもあるが、そうでない大学の受験生は対策をしておかなければならない。

では、受験生に対して、どのような対策が用意されているのだろうか。高等学校における授業が最大の対策となるはずであるが、すでに述べた通り高等学校において十全な指導がなされていないケースも存在する。学校の授業以外の何らかの対策が必要な受験生は少なくないということである。

共通テストは多くの受験者を抱える試験なので、当然のことながら予備校では講習会で共通テスト対策の講座が設けられている。これはこれで重要だが、本コラムでは参考書・問題集に注目してみたい。

試みに、e-hon(全国書店ネットワーク)で「情報Ⅰ」の参考書・問題集を検索してみた(最終検索日は2024年12月12日)。「こだわり検索」で「語学・学参・辞典」に絞って検索し、教科書ガイドなどの教科書に付随するものを除いたものが以下の38冊である。

No.	書名	編著者	出版社	価格	出版年月
1	ベストフィット情報Ⅰ 中学の内容から大学入学共通テストまで		実教出版	850円	2022年
2	高校の情報Ⅰが1冊でしっかりわかる本 オールカラー	鎌田高徳／著 鹿野利春／監修	かんき出版	1,375円	2022年4月
3	高校定期テスト得点アップ問題集情報Ⅰ		旺文社	1,210円	2022年9月
4	高校とってやさしい情報Ⅰ	喜古正士／著	旺文社	1,320円	2022年9月
5	ベストフィット情報Ⅰ 中学の内容から大学入学共通テストまで [2023]		実教出版	870円	2023年
6	藤原進之介のゼロから始める情報Ⅰ 学校で習っていないでも読んで理解できる	藤原進之介／著	KADOKAWA	1,650円	2023年3月
7	高校の情報Ⅰが1冊でしっかりわかる問題集 オールカラー	鎌田高徳／編著 御家雄一／編著	かんき出版	1,540円	2023年6月
8	大学入学共通テスト情報Ⅰ問題集公開サンプル問題・試作問題徹底攻略	近藤孝之／著	インプレス	1,320円	2023年6月
9	高校情報Ⅰをひとつひとつわかりやすく。	岡嶋裕史／監修	Gakken	1,485円	2023年8月
10	共通テスト新課程攻略問題集情報Ⅰ 共通テスト赤本プラス		教学社	1,320円	2023年10月
11	大学入学共通テスト情報Ⅰ最重要POINT60 この1冊で、いっきに完成！ シグマベスト	村井純／監修 鈴木木二正／著	文英堂	1,320円	2024年
12	情報Ⅰ 大学入学共通テスト対策 会話型テキストと動画でよくわかる	植垣新一／著 稲垣俊介／監修	インプレス	1,980円	2024年1月
13	情報Ⅰ 河合塾SERIES マーク式基礎問題集	米田謙三ほか／共著	河合出版	1,320円	2024年2月
14	やさしくわかる岡嶋裕史の情報Ⅰ教室	岡嶋裕史／著	技術評論社	1,320円	2024年2月
15	思考力アップ大学入学共通テスト「情報Ⅰ」なるほどラボ	永野直／共著 稲垣俊介／共著	翔泳社	1,650円	2024年3月
16	高等学校情報Ⅰ重要キーワード736 河合塾SERIES	日経パソコン／編	河合出版	1,100円	2024年3月
17	高校科目「情報Ⅰ」プラスα問題集	小山透／著	山川出版社	1,760円	2024年3月
18	TECHTAN やさしくたのしく学べる情報Ⅰ単語帳なるほどラボ	team YOKAIGI／著	翔泳社	1,650円	2024年4月
19	講義形式で学ぶ「情報Ⅰ」大学入学共通テスト問題集	能城茂雄／著 秋吉祐樹／著 植垣新一／著	大修館書店	1,210円	2024年4月
20	実戦攻略「情報Ⅰ」大学入学共通テスト問題集 2025		実教出版	910円	2024年4月
21	よくわかる高校情報Ⅰ問題集 MY BEST 毎日の勉強と定期テスト対策に	岡嶋裕史／監修	Gakken	1,375円	2024年4月
22	共通テスト総合問題集情報Ⅰ 2025 河合塾SERIES	河合塾／編	河合出版	1,485円	2024年6月
23	大学入学共通テスト情報Ⅰ 10日あればいい！ 2025 大学入試短期集中ゼミ	鹿野利春／著	実教出版	650円	2024年7月
24	大学入学共通テスト情報Ⅰプログラミング問題対策 ステップアップで身に付く練習帳	植垣新一／著 能城茂雄／監修	技術評論社	1,518円	2024年7月
25	くきめる！共通テスト情報Ⅰ KIMERU SERIES	藤原進之介／著	Gakken	1,650円	2024年7月
26	ライバルに差をつける情報Ⅰ鉄板の100題	藤原進之介／著	KADOKAWA	1,540円	2024年7月
27	大学入学共通テスト情報Ⅰ実戦対策問題集	嶋田香／著	旺文社	1,430円	2024年7月
28	かやのき先生の情報Ⅰプログラミング教室	柏木厚／著	技術評論社	1,540円	2024年8月
29	高校生がスッキリわかる情報Ⅰプログラミング&アルゴリズム攻略テキスト	石ろしんじ／著	インプレス	1,760円	2024年8月
30	渡辺の情報Ⅰをはじめからていねいに 東進ブックス 大学受験「実力講師」シリーズ	渡辺さき／著	ナガセ	1,320円	2024年9月
31	高校の情報Ⅰが一問一答でしっかりわかる本	大石智広／著	かんき出版	1,320円	2024年9月
32	イモツル式情報Ⅰ必修キーワード総仕上げ	石川敢也／著	インプレス	1,320円	2024年9月
33	大学入学共通テスト本番模試ⅠⅠ 情報Ⅰ		旺文社	1,100円	2024年9月
34	岡嶋裕史の情報Ⅰ基本用語256+Extra-Mission16 重要用語をインプット！	岡嶋裕史／著	技術評論社	1,100円	2024年10月
35	共通テスト7日で完成情報Ⅰ 大学JUKEN新書	藤原進之介／著	旺文社	1,320円	2024年10月
36	マイルストーン情報Ⅰ	西蓮寺将巳／著	ホクソム	2,200円	2024年11月
37	東進共通テスト実戦問題集情報Ⅰ 東進ブックス	渡辺さき／著	ナガセ	1,320円	2024年12月
38	テスト形式で総まとめ情報Ⅰ標準問題集 オリジナル模試8回分収録 CQゼミ	藤原進之介／監修 関口悠／著	CQ出版	1,650円	2024年12月

これらのうち、5は1の改訂版なので、実質37冊ということになろう。これらを通観すると、いくつかの特徴が見出せる。

共通テスト対策を明示したものは17冊ある。入試対策を示唆させるものを含めて、約半数が共通テスト対策を意識しているということであり、参考書・問題集が出されるのも、そのニーズに応えるためだということになる。

出版された年を見ると、約半数が今年度で、2024年のものだけで4分の3弱になっている。共通テストが近づいてきたことが直接的な理由だろうが、国立大学協会は2022年度のうちに共通テストで「情報」を課するという方針を示している。

事実、2022年度あたりでは、共通テストを含めた大学入試対策を打ち出しているものは少ない。2023年度の途中くらいから（10以降から）、共通テスト対策の色彩が強まったように思われる。先述した共通テスト対策のものを勘案すると、10以降のもので共通テスト対策を銘打っているものは3分の2近くである。これらの点を考えると、最後の1年で追い込めばよいという認識を持たれているということが示唆される。23の書名には「10日あればよい!」という刺激的な文言があるが、2単位科目の「情報Ⅰ」を集中講義のように実施すれば12日で規定の授業時数を満たせるので、誇張とも言い切れないところもある。共通テストが近づくにつれ、35のような「7日で完成」というような文言も出てくる。これでは規定の授業時数以下なのだが、この種の刺激的なタイトルは受験参考書のお約束でもある。

価格が比較的廉価であることも特徴といえる。最も価格が高いのは、36の2,200円である。この事実は、参考書・問題集が共通テスト対策に特化していることを傍証している。個別入試でも出題される他の受験教科では、もっと高価な参考書・問題集がいくらかでも存在する。

私立大学も含めた個別入試において、情報が課されることは極めて少ない。全大学のデータを持ち合わせているわけでもないのに、筆者が把握して

いる範囲のみで示すと、国立大学では電気通信大学で理科と情報のいずれかを選択するパターンが用意され、公立大学では広島市立大学で数学と情報のいずれかを選択することが可能である。なお、両者ともその範囲は「情報Ⅰ」のみである。滋賀大学にはデータサイエンス学部という、情報をいかにも課しそうな学部があるが、学力試験のみで選抜する一般選抜の個別試験で情報は選択科目としても存在しない。

私立大学に目を向ければ、いくつかの大学で情報を選択することが可能になっているが数は少なく、筆者が把握しているのは、京都産業大学の理学部・情報理工学部と慶應義塾大学の情報環境学部くらいである。前者では情報(情報Ⅰ)を含めた2科目入試という方式を設定し、後者では数学とセットで情報を選択することができる(「数学および情報」という科目になる。なお、数学単独の選択は可能だが、情報単独の選択は不可能)。慶應義塾大学に関して特筆すべきは、出題範囲に「情報Ⅱ」が含まれていることである。

ところが、同様の検索方法で「情報Ⅱ」の参考書・問題集を検索しても、1冊もヒットしない。その意味でも、共通テストを中心とした大学受験に必要な科目は「情報Ⅰ」のみで、「情報Ⅱ」はよほど奇特定の人が履修する科目であると認識されていると考えることができる。

共通テストのための科目という認識が強く持たれている点で、受験の世界にあっては、情報科は公民科の各科目と同じ扱いということになる。「政治・経済」は個別入試で選択可能なところも一定数あるが、「倫理」を選択することはほとんどない。新科目の「公共」を選択科目に入れている大学を筆者は知らない。つまり、「情報Ⅰ」は、受験の世界では公民科の「倫理」と同じレベルにあるということになる。

先述した国立大学協会の方針では、「これからの社会に向けた人材育成の中で、文理を問わず全ての学生が身に付けるべき教養として「数理・データサイエンス・AI教育」が普及しつつある。そのような状況の中で、高大接続

の観点からも、「情報」に関する知識については、大学教育を受ける上での必要な基礎的な能力の一つとして位置付けられていくことになる。」（一般社団法人国立大学協会『2024年度以降の国立大学の入学者選抜制度－国立大学協会の基本方針－』（令和4年1月28日），p.2）と述べられている。必要な能力だから試験で問う（＝きちんと勉強しろ）ということなのだろう。

しかしながら、ある特定の能力が必要だから入学試験で問えるかと言われると、そんなに単純な話ではない。高等学校においては、さまざまな科目選択の幅があるため、必要だから入試で課すという論理は、個別入試では通用するものの、共通テストのようなものでは難しい。今回の共通テストで「情報」を導入できたのは、高等学校の実態には目をつぶるとして、「情報Ⅰ」が必修科目になったからということである。

試験の実施状況では「情報Ⅰ」と「倫理」が同じレベルだが、問題集・参考書の検討で分かる通り、受験生にとってその位置づけは公民科よりも低い。国立大学協会の基本方針における物言いに比べると、軽く見られているというのが実態なのである。共通テストで一定の点を取っておきさえすればよいというナメた態度でいると、大学に入ってから、そして社会に出てから苦勞するのだと言っても、眼前の関門に執心する受験生の心に届くかは疑わしい。未来のためにきちんと勉強してもらいたいという関係者たちの願いも、その内容が正論であるだけに、かえって空しく感じられてしまう。

情報科は設置から20年余りが経過したものの、本格的に受験科目の一員に加わったばかりである。言うなれば揺籃期である。現状がこのまま続いていくのか、今後大化けすることがあるのか、しばし注視していくことが必要だろう。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております**

新入生への穂積重行文学部長のエール

— 『大東文化』第365号(1985年4月)の掲載記事から —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

1985(昭和60)年4月、大東文化大学の穂積重行文学部長は、新入生へ向けて「文学部とは極めて総合的な人間の学」といったエールをおくっている(『大東文化』第365号、1985年4月)。

文学部とはなんだろう。大学の歴史をふり返ってみても、日本におけるその現実を考えてみても、もう一つはっきりしない。はっきりしている点はただ一つ、普通という意味での「文学」だけを学ぶわけではないということだ。「法学部」「経済学部」などの方が、はるかに名が体を表わしている。現に諸大学文学部の学科内容はかなりまちまちで、それが特徴をなすともいえる。我われの大学でいえば、「日本文学」「中国文学」「英米文学」、そして「教育学」の四学科があることはご承知のとおりだが、その半面「哲学科」や「史学科」などが欠けている。

このことは形式的にいえば、たしかに一つの欠点であろうし、将来これらの学科の新設について考えることには十分の意味があるが、そのことだけが問題なのではない。…我われの「文学部」において、哲学科や史学科が欠けているということは、形式上ではたしかに一つの欠点ではあるが、内容的にはそれぞれの分野でこれを包み込んでいくことが狭い意味での「文学」研究の上でも絶対に必要なのである。哲学科、史学科がないということは、哲学、史学がないということとは別問題である。かえて、このことが新しい学問上の総合への契機を孕み得るのであり、制度上の問題はともあれ、我われも諸君も個人個人の学問の上で、つねにつよく留意すべき点だと思う。

さらにいえば「教育学」は、それ以外に直接的に自然科学や社会科学はもとより、法律や行財政等を含めての政治・政策の問題に現に深くかかわっているの

であり、その意味では「教育学部」として独立した方が、差し当たり形式的にはすっきりするといえるかもしれない。しかし、「形式的にすっきりする」ことが問題の中心点ではないであろう。これらは、要するに現在及び将来の「文学部」の内容をなすべきものが、極めて総合的な「人間の学」でなければならないということ、いや我われ個人個人がこの観点に立たなければ、専門化された研究すらも、結局は大きなところで底が抜けていたということになりかねないということなのである。

そして、このことは「文学」の主題としての「人間いかに生きるか」という問題と連なるものであろう。だからこそ、そこでは「技術の学」にとどまり得ない領域があまりにも広いのであり、だからこそ「もう一つはつきりしない」ことの意味を考えねばなるまい。

大東文化大学の文学部（日本文学科・中国文学科・英米文学科・教育学科）が、どういう歴史的な経緯を有し形成されてきた学部学科なのかをあらためて考えてみる必要があるだろう。まさに総合的な人間の学を目指した文学部であった。

大正時代の女子高等教育(69)

同志社大学女子学生の受け入れ

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

同志社は、明治37年、「専門学校令」による同志社専門学校を開校し、45年「専門学校令」による同志社大学と名称変更した。大正9年、海老名弾正が第八代同志社総長(大正7年社長から総長と改称)に就任した。就任挨拶の中で、“…新島先生が女子に平等の地位を与え、女子に教育を与え、女子を敬い尊んで男子の地位に引き上げようと苦闘したことに自分も共鳴した…英国は1,500万の女子が参政権を有している。…今後日本の教育者は人格主義、デモクラシー、インターナショナリズム、男女平等主義の四大主義に基づいて新天地を開拓すべき時代となった”(畑中理恵『大正期女子高等教育史の研究』—京阪神を中心にして—『同志社百年史』通史編一 参考)と述べた。

同志社は創立当初から男女平等主義の理念に基づき男女共学を目指していた。同志社女学校ができる前、同志社英学校で男女共学体験をした3名の女子がいる。徳富初は徳富蘇峰^{ろか}・蘆花の姉で、後に湯浅治郎夫人となる。横井宮は横井小楠の長女であり、横井時雄の妹で、後に海老名弾正夫人となる。山本峰は山本覚馬^{かくま}の次女で、後に横井時雄夫人となる。徳富初と横井宮は、熊本洋学校で米国人教師L.L.ジェーンズの許しにより男子と共に学んだ経験を持つが、その時は男尊女卑の考えが根強い男子生徒たちが忌避するため、教室に入れてもらえず、廊下で授業を聴いた。しかし、同志社ではアルファベット順の名簿に、男子の間に女子も名前を記載され、文字通りの男女共学が行われていた。卒業まで学校に留まらなかったため、同志社女学校卒業生の中に名前はないが、それぞれ、夫の社会的な働きを支え、家庭の内外にクリスチャン婦人としての生き方を示した。



左から横井宮、徳富初、山本峰
(『同志社女子大学125年』より)

同志社大学女子学生の受け入れ

同志社は、大正9年、「大学令」（大正7年12月6日勅令第388号）による同志社大学に昇格し、高等女学校卒業者を選科生として入学させるという学則改正を行い、10年5月認可を得た。さらに、11年の学則改正で、「同志社女学校専門学部英文科卒業者」を同志社大学各学部にも本科生として入学させることを決めた。改正理由は、「学部入学ニ関シ予科修了者ト同等ノ学力アルモノト認メタルニ依ル」とある。

大正10年度の「同志社総長報告」の一、「重要事項」の中で、

同志社女学校専門学部英文科の卒業生を同志社大学の本科生となし、大学課程全部を修了し得るやう文部省より認可を受く。同志社は幸にして男女二種の学校を有するが故に、この便利を空しうすることなく、大学各部に於て男女共学を実施するは、同志社教育をして、日本教育界に於ける先達たらしむる所以と思ふ。従って其任務は甚だ重いといはねばなるまい。男女共学の暁には大学本科はその学生を大学予科と女学校専門部により収容する訳になるが故に、学生数の増加は自然の趨勢である。近き将来に於て女学生の数が大に増加するは予期すべきである。従って、大教室の必要も亦予期して置かねばならぬ。（『同志社百年史』資料編一）

と記している。「同志社大学の男女共学が日本教育界の先達となる」という海老名総長の自負が感じられる。海老名は、女子大学を建てるよりも男女共学が最も便利であるという合理的、男女平等の考えを持っていた。余談だが、海老名は熊本洋学校時代、男尊女卑の考え方が浸みこんでいる男子生徒の反発が強く、新入生の指導を命じられた者を代表して、女子生徒の排除をジェーンズに再々申し入れた。しかし、ジェーンズに、「女をさげすむ男が、母を持ったり、妹を持ったり、まして妻を持ったりすることは不自然ではないか。…君が子どもの時にお風呂に入れてもらって体をきれいにしてくれたのは誰だ。君のお母さんではないのか。君のお母さんは男か女かどっちだ？」（『ジェーンズ物語』）などと諍々と諭されて目を開かれた。熊本洋学校が明治9年に閉鎖されたため、30余名の仲間と共に同志社英学校に入学した。そして、新島の感化を受けた。この時海老名が排除を求めた女生徒の一人が横井宮で、後に宮と結婚する。

こうして新島襄から受け継いだ「女子を男子の地位に引き上げること」すなわち同志社大学における男女共学が、内部校に限ってではあるが、海老名総長によって実現したのである。文部省には女子の高等教育や男女共学など反対する勢力があるので、一気に女子を本科生として入学させると申請せずに、まずは選科生として、次に本科生として入学させるという段階を踏んで実現させたのは海老名総長の手腕といえよう。

選科生や聴講生ではなく、女子を正規の学生として入学を認めたのは、大正2年の東北大学(3名入学。但し、以後大正12年まで途切れる。)に続くものだが、12年4月の時点では同志社大学のみであった。入学生は4名で、いずれも文学部であった。4名のうち大田のぶと清水つるよは大正15(昭和元)年、大学英文学科を卒業し、同志社の女性最初の文学士となった。13年に法学部に1名盛口婦美が入学した。14年に田辺繁子が入学し、後に法学博士となり、専修大学教授となる。大学進学者は年々増加した。その後も加藤さだ(14年文学部入学、南山大学教授)、今村綾(昭和3年入学、同志社大学教授)などが続いた。

昭和に入ると、同志社大学は、同志社女学校専門学部英文科卒業生以外にも女子の受け入れ指定校を増やしていく。同じアメリカン・ボード系列の神戸女学院専門部大学部、同高等部乙類、梅花女子専門学校英文科の他、東京女子大学大学部、同英語専攻部本科、日本女子大学校本科文学科、同専門科英文学部、聖心女子学院高等専門学校英文科、津田英学塾本科、東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校などの卒業生にも枠を広げた。昭和15年、同志社女学校専門学校(昭和5年6月改称)卒業生は英文科、家政科を問わずに同志社大学に受け入れられるようになった。同時に同志社女学校専門学校以外は指定校制を廃止し、外国語履修などの一般化された条件で受け入れることになる。

中等学校教員無試験検定の認可

大正13年、同志社女学校専門学部卒業生に、中等学校教員無試験検定が認可された。大正3年から11年までの卒業生は83名で、現職者36名と経験者16名を合わせると、教員となったのが62.7%である。この実績から12年6月、英文科卒業生と家政科卒業生

に対してそれぞれ英語と家事の中等学校教員無試験検定を申請し、同年7月認可された。12年3月の卒業生から適用されることになり、初年度は8名が文部省から師範学校中学校高等女学校教員免許状を与えられた。13年には中等学校教員無試験検定校に指定された。

同志社女学校は、明治20年から高等科を設置して、高等教育をめざしていた。25年、松浦政泰による再建を通して、軌道に乗るのは、45年、専門学校令による「同志社女学校専門学部」となってからであろう。さらに同志社大学が大正12年同志社女学校専門学部の英語科卒業生を正式の学生として受け入れ、男女共学の道を開いたことが大きい。

だが、順調に見えた専門学部も、昭和に入ると陰りが見え始める。昭和2年度の同志社女学校総数は、1,449名となり、専門学部も半数に近い719名を占めるようになった。この時期が専門学部の歴史を通して最盛期であった。この後、普通学部の入学者は増えるが専門学部の入学者は減少していく。この年度から管理上各学部別々に部長を置くことになった。3年1月、普通学部を高等女学部と改称した。財政面も教員会議も分離独立させた。学友会も同年2月の総会で、両学部に分かつことを決議した。

松田道の改革—開かれた教授会

こうした中で、教授会にあたる午餐会に専門学部生徒を列席させるという大胆なことが実施された。おそらく大正11年2月、同志社で最初の女性女学校校長に就任した松田道の提案であろうと言われている。昭和3年1月17日、定例教授会に週番生徒26名が出席した。1月31日の教授会から全14クラスの級長副長(隔週交替)および週番(AB各組より1名隔週交替)の出席と、「発言杯は勿論自由なること」などを決めて、生徒の意見をも聞く開かれた教授会を実施した。

松田道は、明治20年同志社女学校3年の時、横浜フェリス英和女学院に転校。25年同校を卒業し、再び同志社女学校専門科文学科に入学。在学中に、津田梅子はその設立に尽力した「日本婦人米国奨学金」による米国留学生第1回奨学生に選ばれてプリンマー大学に留学。同大学でBachelor of Arts(教養学士)を取得し、同志社女学校に就任するが、再びプリンマー大学大学院、コロンビア大学大学院に留学し、英文学を専攻し

た。大正6年9月の学制変更で、同志社社長の大学学長、中学校校長、女学校校長の兼任制は廃止され、専任総長制に改められた。大正11年2月、松田は同志社女学校校長に就任した。しかし、昭和3年1月から再び、女学校校長を総長が兼任することになり、松田は専門学部部長となった。5年、同志社女学校専門学部と高等女学部は、同志社女子専門学校と同志社高等女学部の別組織となる。松田が同志社女子専門学校校長になるのは昭和7年4月である。

参考文献

『同志社女子大学125年』

『同志社百年史』通史編一

『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校』上巻・下巻

畑中理恵「『大正期女子高等教育史の研究』—京阪神を中心にして—」

湯川次義『近代日本の女性と大学教育』教育機会開放をめぐる歴史

宮澤正典『同志社女学校史の研究』

黒田孔太郎「ジェーンズ物語」

子どもたちと考える校則⑰

—なぜ化粧が校則で禁止されているのか—

はった ともかず

八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

校則には、「服装や頭髪、校内外の生活に関する事項」や「生徒会活動などに関する規則」など、様々なものが含まれている。そして、「校則の在り方」や「校則の見直し」を考えるにあたっては、それらの規定に対して“なぜ”や“そもそも”という視点で迫っていくことが大切だと筆者は感じている。そして、“なぜ”や“そもそも”に迫る際にヒントを与えてくれるものが先行研究や関連書籍だと考えている。そのため、それらの資料から教員や児童生徒が情報を読み取り、「当該規則の制定過程」や「制定された当時の社会情勢」などを明らかにすることは、「校則の在り方」や「校則の見直し」を考える際の有効な方策になると感じている。

そこで本稿では、「化粧」が校則で禁止されるようになった歴史的背景や社会情勢について、1本の論文の内容を整理・紹介するなかで、明らかにしていきたい。

2. 先行研究の分析

本稿では、小出治都子「なぜ化粧することは校則で禁止されているのか—戦前戦後の教育からの一考察—」（『大阪桐蔭女子大学研究紀要』第14巻，pp.71-78, 2024年収録）を取り上げ、概要を整理したうえで、雑感を述べたい。

小出2024の章立ては次の通りである。

0. はじめに

1. 先行研究からみる児童・生徒の化粧
2. 戦前の女子教育から見る化粧
3. 戦後の教育改革と化粧
4. おわりに

参考文献

小出2024では、「なぜ化粧することは校則で禁止されているのか」「校則で禁止されないまでも児童・生徒が化粧することは好ましく思われぬのか」について、先行研究では言及されていないことを指摘している。そのうえで、先行研究を概観したうえで、教育の視点からこの2点の疑問に迫っている。

まず、「先行研究からみる児童・生徒の化粧」では、“児童・生徒と化粧”について取り上げた文献や調査を取り上げ、紹介している。具体的には、児童・生徒の化粧に対して、社会のなかで一定の価値基準に基づいて対策をとることを目的とした「化粧教育」などが紹介されている¹⁾。併せて、児童生徒や教職員が、化粧などの装いや影響、使用方法について正しく知ることの重要性にも触れている。そのうえで、児童・生徒の化粧に対して、的確な助言や指導、注意がでえず、野放しになっている構図を指摘している²⁾。

次に、戦前の女子教育と化粧について考察している。当時の女学生は、高等女学校に通っている間に結婚し、退学することが良しとされており、化粧をすることは身だしなみとして捉えられていた。そのため、昭和に入ることまでの女学校では、化粧をしないで学校に行く生徒は女性としての身だしなみを欠く不道徳な者とされたことを、先行研究を踏まえながら紹介している。ここからも、近代の高等女学校では、身だしなみとしての化粧は容認されていたことが読み取れる（過度な装いは許容されていない）。

次に、戦後の教育改革と化粧について考察している。戦後、女子教育の水準引き上げにともない男女共学制が実施される。その一方で、思春期の男女交際などが、純潔教育の課題として浮上するようになる。そのため、1951年に刊行された『男女の交際と礼儀：学校における指導の解説 文部省版』には、清潔を重んじた少女「らしい」髪型、給仕さんの「ように」見える化粧という書き方がみられることを紹介し、科学的な視点ではなく、道徳的な視点で学校の化粧が取り上げられていると指摘している³⁾。

「おわりに」の部分で著者は、①大人は化粧に対する認識のアップデートが必要、②子どもたちはメディアや周りの環境に流されず、「なぜ自分には化粧が必要なのか」を考えることが必要である、と提言している。

3. 雑感

小出2024で取り上げられていた「なぜ化粧することは校則で禁止されているのか?」という視点は重要な指摘である。

これまでの連載でも度々述べてきたように、「なぜ〇〇は禁止されているのか」「〇〇が禁止されるようになったのは“いつ”なのか」といった視点で校則を見つめ直す必要があると感じている。表面的な部分だけを捉えて「校則を見直す」ことは、問題の根本的な解決にはならない。校則に規定された一つひとつの項目(制服・化粧など)の歴史を丁寧に読み解いていくことで、それらが導入された(容認された)背景を知ることにつながる。どのような社会情勢・考えのもとで校則が制定(改訂)されたのかを丁寧に見つめ直すことで、それを「今」に置き換えて考えることに繋がることを期待したい。

4. さいごに

この連載では末尾にQRコードを添付しています。拙稿に対するご意見・ご感想などございましたら、ぜひQRコードからお寄せいただけますと幸いです。今後の研究や執筆活動の参考にさせていただきます。なお、本稿における内容や意見は、筆者個人に属し、筆者が所属するいかなる組織・団体の公式見解を示すものではありません。



ご意見・ご感想などは、上記のQRコードからお寄せください。

註

- 1) 小出治都子「なぜ化粧することは校則で禁止されているのか―戦前戦後の教育からの一考察―」『大阪桐蔭女子大学研究紀要』第14巻, 2024年, p.73を参照。
- 2) 前掲書p.73を参照。
- 3) 前掲書p.75を参照。

【参考文献】

- ・小出治都子「なぜ化粧することは校則で禁止されているのか―戦前戦後の教育からの一考察―」『大阪桐蔭女子大学研究紀要』第14巻, pp.71-78, 2024年
- ・「ルールメイキング」(2024年10月15日確認)
<https://rulemaking.jp/>

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(9):

『全国学校案内』(明治41年)(1)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号からは、内外出版協会より刊行された高橋都素武編『全国学校案内』の1908(明治41)年のものを取りあげる。

同書は1908(明治41)年と1909(明治42)年に刊行された。1911(明治44)年には同社から『最新全国学校案内』として刊行されたが、編者が変わっている。同書は、男子の教育機関のみならず女子の機関も掲載しているが、ここでは男子の機関のみを検討していく。

今号から取り上げる1908(明治41)年のものでは、「男子外国語学校」「理学私立学校」「専門学校入学私立予備学校」に予備校と見なせるものが掲載されている。今号では、「男子外国語学校」「理学私立学校」に掲載されたものを取りあげる。同書では編者の高橋による学校の品評も多いのだが、必要な情報のみを抽出するということはず、全文を翻刻する。同書ではさまざまな傍点が多用されているが、それは省略する。

私立正則英語学校(東京市神田区錦町三丁目)

本校と国民英学会とは、実に本邦英語学界に於ける二大観であつて、滔々たる受験学生の最大根拠地である。本校の学科は之を午前部、午後部、及び夜学部に分科、更に午前部を分ちて、予科、普通科、普通受験科とし、午後部を分ちて高等受験科、文学科、中等教員養成科、臨時受験科とし、夜学部を分ちて予科、普通科、高等科の三種とし、又夏期休暇中には例年夏期講習会なるものがある。尚ほ以上の各学科に就いて、詳しく解説すれば、

予科 修業期一年、普通科の予備にて初歩より始む学課は組織英語、読方会話書取、綴字発音、読書

普通科 修業期一年中学卒業程度迄の英語を教ふ、学課は組織英語、読方会

話書取、発音法、文法、作文、読書

普通受験科 修業期一年、普通科卒業の程度にて諸官立学校の受験準備、学科は組織英語、難句集、読方書取会話作文、読書

高等受験科 修業期一年、普通科より稍程度高きもの学課目は前に同じ外に文法を加ふ。

文学科及教員養成科 修業期三年、受験科卒業の程度にて高等の英語及英文学を授く学科は組織語学、読書（散文、詩）、作文、雄弁法、教授法

臨時受験科 毎年四月より六月まで、諸官立学校の入学試験準備、学科は其都度に定む

高等科 修業期三年、夜間に於て高等学校程度の英語を教ふ学課は組織語学、会話、雄弁法、作文、読書

本校の創立は明治二十九年であつて、国民英学会に後るゝこと殆んど十年にして起り、然も幾もなく此の先進者を凌駕し、また英語学校の外に予備学校を設け、後更に芝分校（慶應義塾前）を増設し、今や六千の学生（予備校生徒を含み）は校の内外に溢れんとしつゝある。是に於てか、吾人は校長齋藤氏の学と手腕を思はざる可らず。齋藤氏は其の学、英語組織学の研究に於て天下を独歩し、自ら英国の斯学大家以上と称して居る。氏の講堂に立ちて得意の講義をなすや、快弁滔滔として水の急瀬に奔るが如く、理義委曲精到をきはめ、始めて氏の講義を聞くものは、最初に二三箇月の間は茫然として五里霧中に迷はぬ者は稀れである。即ち学生は氏の名声を聞き、文法講義の雄弁に酔し、かくて今日の全盛を極めて居るのである。翻つて本校出身者の成績を見れば、各種試験の結果、若くは世に立てる人物の顔振れに徴しても、しかく学生の多数なるに比すれば、決して優等の實力を示して居るものと云ふことは出来ない。これは本校が、専ら組織英語（即ち文法）にのみ重きを置くの結果であるや否やは疑問であるが、世には実用英語の研究を主張し、文法の研究を無用視するものさへある。思ふに此の点も亦考一考^{ママ}を要する値ひがある。

職員（校長）齋藤秀三郎、（教頭）渡邊秋蔵、（講師）齋藤秀三郎、花輪虎太

郎、伊藤豊守、岡田増蔵、農学士武信由太郎、文学士池田夏苗、理学士高須磯郎、以下約二十名外に外人四名

卒業生 伊藤豊守氏最も有名にて齋藤氏門生中の白眉の称がある、其の他本校講師にて神崎保太郎、谷善太郎、宇高兵作、山田巖等、又地方にて中等教員となれる者も少くない。

私立国民英学会（東京市神田区錦町三丁目）

共に神田の中央なる錦町に対立し、一は老成の大人の如く、一は英気満身の青年の如く、互に其の設備を振張拡大して、両々相下らざらんとするが如きものあるは、是れ磯部氏の国民英学会と齋藤氏の英語学校とである。本会は明治二十一年、磯部彌一郎氏が、博言博士イーストレキとともに創立する所であつて、開設の当時生徒は僅かに十余人を有するに過ぎなかつたが、世運の進化と共に語学の必要益々加はり、従つて本校も亦急速の膨張を來たし、今や一千余名の卒業生を出し、殆んど三千に余る多数の学生を有する事となつた。

本会の学科は、種類頗る多く、之を分ちて七科としてあるが、要するに（イ）中学校卒業程度の初頭英語を授くる者と、（ロ）諸官立学校入学者、又は英語科中等教員試験に必ずべき英語準備、（ハ）各種の官吏（外交官領事等）会社員となる者に須要なる英語を教ふるものである。即ち各学科の要目を摘録すれば、（但し第三学期を一年とす）、

- 一普通科（英語初歩より中学四年程度まで、修業二学期間）
- 一受験科（諸官立学校入学英語準備のため、修業二学期間）
- 一高等科（受験科の稍程度高きもの修業三学期間）
- 一会話専修学科（会話作文演説唱歌等あり修業三学期間）
- 一数理化受験科（諸官立入学試験準備修業一学期間）
- 一予備試験受験科（司法官弁護士文官高等試験英語準備）
- 一英文学科（中等教員、外交官試験等の受験準備）
- 一夏期講習会（毎年七月より八月迄学科程度は其都度定む）

授業は午前、午後、夜間の三種があつて、午前に普通科、受験科、高等科、午後を受験科、英文学科、夜学に普通科、受験科、高等科及び会話専修科の四科がある。入学者は多くは受験準備の爲めであつて、卒業生の数は比較的多くないが、嘗て入学せし学生の総数は無慮三万以上に達し、本校が直接又は間接に我が英語界に裨益した功は甚だ著大である。殊に其の英文学科の成績は最も優良であつて、文部省英語教員試験に於ては、其の合格者中三分の一、乃至二分の一は常に本校出身者を以て占めて居る。要するに本会は、徹頭徹尾実用英語主義である。

講師 校長磯部彌一郎、教頭岡村愛蔵の二氏を始め高橋五郎、山口□太、足立豊三郎、其他本会校友等廿余名があつて賛成員には井上十吉、新渡戸稻造、和田垣謙三、中嶋力造の諸氏及び英国文法大家子スフィールド等がある。卒業生 各方面に知名の人多く文学博士建部遯吾、同岡田銀蔵、法学博士小野塚喜平次、ドクトル富士川游、催眠学会長山口三之助等を始め其の他宮田修、杉村廣太郎、幸徳秋水、松居松葉、蒲原有明、豊島定、林西二、服部文四郎等。尚ほ本会講師をはじめ各地方に中等教員たるもの五十余名ありと云ふ。

私立模範英語学校（東京市神田区裏神保町九）

本校は明治三十七年の創立であつて、校主は藤生金六、有名なる高橋五郎氏教務を主宰し、其の目的は最近着実の新教授法によつて、模範的に実用の英語と完全なる英文学とを教授し、又実業家と氣脈を通じて卒業後就職の便益をはかり、殊に米国渡航者の爲めには種々周旋の勞を取るといふに在る。課程を大別して夜学部及び午後部の二種とし、更に夜学部を分ちて普通科（中学程度）、夜学科三年級（兼受験科）、及び高等科（英文学科兼教員養成科）とし、午後部を分ちて受験科（中学卒業程度）及び高等科（夜学部と同じ）として在る。講師は高橋藤生の二氏以下、永井、舟橋、高野、蜂屋等の良教師多く、其成績に於ても都下の英語学校中出色の称がある。但し本校の如く、徒らに他を漫罵して自家の完全をてらひ、皇張誇大以て自ら得々たるは誠むべきである。

東京実用英語学校 英語を教授する夜学校であつて、教科及び修業年限を本科二年(中学程度)、受験科一年(中学卒業程度)、及び商業英語科(中学卒業程度)、とし、商業英語科にては諸会社、銀行及び商店員等を志望するものゝ為め、業務上必要なる英書を教授して居る。校長西澤岩太氏を始め、根岸由太郎、松尾音次郎、阪本保三氏以下総べて十一名の講師がある。(東京市神田区錦町三丁目)

東京英学校 明治四十年第三高等学校教授蜂屋可秀氏の設立にかゝり、男子部を東京英学校と称し、女子部を東京女子英学校と称して居る。課程を普通科(中学程度)、受験科(同卒業程度)、高等科及び研究科の四種に分ち、講師には蜂屋校長を始め、竹村真次、高野禮次郎氏等の九名がある。(東京市神田区猿楽町十一番地)

研数学館(東京市神田区猿楽町九番地)

研数学館は、前陸軍教授奥平浪太郎氏の設立せる数学専門の学校で、学生は常に其の構内に溢れんばかりである。課程を別ちて別科、初等科、及び普通^{ママ}学とし、修学期間は別科二箇月(数学初步)、初等科三箇月(中学程度)、普通科二箇月であつて、普通科は主として諸官立学校受験者の為めに設け、彼の正則予備学校の数学科と共に、数学を補習する青年の最も多く集合する所である。学期は毎月新に之を開設し、以て随時入学の便を図つて居る。講師は三人にて授業を担当し、即ち奥平館主、佐川安宣、長橋瀧三の諸氏である。

東京数学院 諸学校の学生、並に数学教員たらんとする者の為めに、数学を教授する所であつて、後者は東京中学校の中に置かれてある。課程及び修業年限を普通科一年、本科一年四箇月とし、普通科にて初等数学を授け、本科にて高等の数学を教授し、別に諸官立学校入学者の為に受験科を設置してある。院

主兼院長は、数学家として又学校经营者として有名な上野清氏である。(東京市神田区仲猿楽町)

次号では、「専門学校入学私立予備学校」に掲載された情報を検討していく。

『嘉納治五郎』（1964年）を読む(2)

とみおか まさる
富岡 勝（近畿大学）

はじめに

第118号から講道館から1964年に発行された『嘉納治五郎』を読みはじめた。第118号では、章立てを紹介し、特に「第二章 教育家としての嘉納治五郎」を中心に、興味を持ったトピックを順不同で紹介したい旨述べた。

本号では、その第二章のなかの「三 嘉納教育精神の精華 | 教育の事、天下これより偉なるはなく、楽しきはなし —高師校長（第一次）として—」に収録されている「森文相の遺法とその批判」（144頁から146頁）という文章に注目したい。

森有礼の高等師範学校方針の成果を疑う

この文章では、森有礼文相の高等師範学校方針の成果に関する嘉納治五郎の見解が紹介されている。嘉納治五郎は、1893年9月に高等師範学校長に着任しているが、その頃の高等師範学校の状況があまり良好ではないと感じた上での見解だと思われる。その概要は以下の通りであり、なかなか挑戦的な見解ではないだろうか。

- ① 森文相の師範教育に関する尽力と功績が称えられているが、高等師範学校に着任して、高等師範学校に関する森文相の方針の成果に疑問を感じた。
- ② 森文相による順良、信愛、威重の三綱の主張や、兵式体操の導入による軍队的な教育は、考えとしては悪くないが、さほどの効果が現れていない。古来より、教育において形から人を作り上げることはあるが、形ばかり作って魂を入れなければ役に立たない。

- ③ 森が主張したる順良、信愛、威重の三綱は正しいが、それを養うために努力した跡が現れていない。根本を養わずして形の上でのみ三綱を養おうとするのは、教育の精神をあやまるものではないか。
- ④ 森が長く生きていれば、効果をもたらしたかもしれないが、不幸にして森は暗殺されてしまったため、後の人が徒にその形式のみを模倣したためにより結果が得られなかったのだろう。

元資料は嘉納口述の記録

昨年2月に講道館資料館を訪問したときに『嘉納治五郎』（1964年）を始めて目にして、この「森文相の遺法とその批判」に興味をもち、この文章のもとになった資料がないかどうか、同資料館でお尋ねしたところ、この文章のもとになったのは、嘉納治五郎の口述した内容を落合寅平がまとめた「教育家としての嘉納治五郎」の一部で、『作興』第8巻第9号（講道館文化会、1929年9月発行）で発表されたものであること、また、「教育家としての嘉納治五郎」は大滝忠夫編『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』（新人物往来社、1972年）に収録されていることをご教示いただいた。

口述記録をまとめた落合寅平は、『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』によれば、1898年3月に東京高等師範学校文科を、翌年3月に東京高等師範学校研究科卒業したあと、宮崎県宮崎中学校長、福島県会津中学校長、栃木県宇都宮中学校長、高等師範学校教授、東京府立第五中学校長などを歴任した人物である。

講道館資料館からの示唆をもとに、国立国会図書館デジタルコレクションで、『作興』第8巻第9号を探したが、残念ながら第8巻第9号は公開されていなかったため、同じく国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧した『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』に収録された文章を確認した。

その内容は次の通りである。たしかに口述記録としての生々しさが感じられ、嘉納治五郎自身がおそらくこのようなことを述べたのであろうと推測できる資料

となっている。森有礼のことを「教育の素人」と述べている点などは、嘉納治五郎の教育者としての強い自負を感じる。

森文部大臣の行政を批判す

自分のもっとも失望したのは、森有礼氏の師範教育における功績の余りに挙がつておらなかったことであった。外観から見ておれば、森氏は大いに師範教育に心を注ぎ、東京師範学校を高等師範学校と改めて大いに力瘤をここに入れたようにきいていたが、自分の考えるところでは、森氏の着眼はよかったのであるが、同氏自身が教育のことに精通せず、素人考えてかれこれと案をたてて、これを実行した結果が、存外効果が挙がらなかったという始末になったのではあるまいか。

森氏は師範教育に順良・信愛・威重の三徳を主張したが、これは主張としてもより悪くはないが、これが成績においてさほどの効果を顕わしていない。また、森氏は兵式体操を奨励し、軍隊教育のごとくに教育者を教育しようとした。これについても、自分は思いつきは悪いとは思わないが、これを行なう方法が当を得ておらなかったと考える。なるほど、古来教育において、一部分形から人を作りあげることにはある。これにも道理はある。しかし、魂を入れてかつ形を作るのはよいが、形ばかり作って魂を入れなければなんの役にもたない。

師範教育にもっとも必要なるは、教育の力の偉大なることを理解し、教育の事業の楽しきことを知り、かりに外面からうける待遇が肉体的にも精神的にも十分でないとしても、教育事業そのものを楽しんで職にあたる。これが教育者の魂である。この魂を養うことが教員養成の第一である。これを養うために努力せられた跡が一向現れていない。威重にしてもおのれ自身が価値あるものなることを自覚し、自己が責任ある位置にあるを自覚して始めて、威重は教えずして備わるものである。信愛に至っては、教えて出来るものではない。人に指図して出来るものではない。人を信愛するに至るには、おのれ自身に人のためにつくすべき余力をそなえしめることと、人を信愛して自ら満足し得るような深き遠き思慮を養うと

いう根本的素養に基づかずしては、人を信愛し得ないのである。人を信愛せしむるには、この根本素養を必要とする。

しからざれば、決して結果は挙がるものでない。また、順良ということも、いたずらに人と争い、いたずらに自ら高ぶることが自己の価値を高め、自己の目的を達するゆえんでない。長上には不必要にさかわらず、自らへりくだり、控目にするのがかえって己を高むるゆえんであることを了解せしむれば、人は順良となる。ただに順良なれと強うるときは、かえってこれにそむき、または卑屈となり、正当に反対し、抗議すべき場合にも尻込みする弊に陥るであろう。いまかりに、この三徳をよいとしても、これが根本を養わずして形の上でのみこれを養おうとするのは教育の精神をあやまるものである。

森大臣のとき、山川浩氏が高等師範学校長に任じ、松石という陸軍の将校が兵式教官として教育の任にあたっていた。山川氏とは自分はさほど親しくはないが、人格として価値ある人と信じている。さりながら、教育のことは素人であったと思う。松石氏は陸軍優秀の士官であったが、士官学校ならばともかく、教育者養成の学校において、いかにして生徒を教養すべきかについてはその見識がどうであったろうか。兵隊を訓練するには適当であっても、或る程度の教育を受けて、高尚なる理屈を考える人間を教えるには、それ相当の仕方がなければならぬ。自分がかつて参謀本部の或る部長であった東条中将と懇親で、しばしば意見を交換したことが、この人などは、軍隊教育においても大いに訓育に重きをおき、形式には余り重きをおかぬ人で、魂さえ作っておけば形式はいつでも教えられるといっていた。

深く精神を顧慮せず、魂を入れずに単に形を軍隊と同様に整えたとしたなら、教育者としても、はた、軍人としても、さらに注文すべき点をのこすような結果を持ち来すであろうとおもう。森氏なお世にあってその事業を徹底したならば、或いはある効果をもたらしたでもあろうが、不幸にしてその人早く兇刃にたおれ、これをつぐべき人もなく、別人がただ、その形と方法のみを模倣したから、よい結果が得られないのはもとより当然のことである。

自分は高等師範学校長就任以来、訓育は大いに重んじたが、兵式の形のごときは格別なる注意を払わぬことにした。高等師範学生がドイツ形の軍帽を冠っていたのを、普通の学生帽にかえたのを始めとし、寄宿舍における生活すべてを、形式に拘泥せず精神を重んじ、万事の解決をしていった。

(大滝忠夫編『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』新人物往来社、1972年、256頁から258頁)

次号につづく

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

教育社会学者の中澤涉さん(立教大学)は、現代日本の奨学金事情などについて、「格差は分断とエゴ生む」(『東京新聞』2024年4月3日、12面)と題し、今の日本では総じて「私的負担が重いほど、成果は個人の努力でつかんだ私的私益と見なされ、社会にどう還元するかという視点は薄くなってしま」う点がいへん問題である…といっています。これでは、「教育の格差放置で社会には自己責任論が広がり、生まれるのは一体感でなく分断とエゴ(利己主義)」でもって、「進学や仕事で選択の自由の幅は狭まり、その人の能力が生かされる部分は減ってしまう」と危惧します。そんな中澤さんの主張に基づけば、教育は「短期やダイレクトにではなくても、巡り巡って社会全体に寄与する」発想を必然的に有するものだとし、「自分は社会から隔絶された単独の人間ではなくて、社会の中の一人なんだと学校で実感できれば、結果として社会に協力する意識が高ま」るであろうと強調します。したがって、現代の若者の教育機会についても、社会として自由に選択できる門戸を意識的に開いておくことが「社会の安定」や「民主主義への寄与」にもつながっていくと提言しています。一見すると、とてもむずかしい感じもしますが、案外ちょっとしたことがキッカケで、悩ましい事態が好転し明るい展望が開けていくことも十分あり得るのかもかもしれませんね。

本年12月20日の朝日新聞ニュースで、西東京市の小学生らが開校記念を期して自身の夢や希望を記した風船(自然に優しい分解される素材で制作)を飛ばしたところ、その1つが20キロ先にある川崎市の精密機器企業の敷地に落下し、それを見つけて小学生の夢(将来は漫画家になり夢を描きたい!です…)に感動した企業の社長さんが、夢を語る小学生らとぜひ企業としても積極的に交流していきたいとして小学校への出前授業などが始まったといっています。そして、またそのお礼に、漫画家を夢みる小学生が描いた絵を社長さんに手渡したそうですよ。なんとも感動的な素敵なお話ですね。(谷本)

武藤章・森田敏彦・菅澤康雄・井出教子編著の『楽しくなくちゃ授業じゃない 中高社会科のおもしろ教材』(同時代社、2024年)を読んでいたら、森田敏彦氏による「グループ学習はしない」という文章に目が留まった。

現在の学習指導要領で強調されている「主体的・対話的で深い学び」のため、近年、小・中学校や高校ではグループ学習が行われることが増えている。私も大学の教職課程でグループでの意見交流に力を入れている。

しかし元埼玉県立高校教諭の森田氏は、「私はグループ学習が苦手です」と告白しながら次のように述べている。

「グループ学習では、だいたい、頭のよい子や元気な子がリーダーシップを取って、意見を出し合うことになります」

「ある高校教員の友人に、「クラスの中にグループ学習が苦手な生徒がいるはずだ」という話をしたことがあります。その友人が1年生の担任になったときに、入学そそうの二者面談でその話をしたら、5~6人が「授業中、放っておいてほしい」と答えたそうです。小学校や中学校はグループ学習が盛んです。それにはもうこりごりだと思っているかはわかりませんが、苦手だと思っている生徒がいるのです。6グループを作ったとしたら、グループに1人はいるかもしれない計算になります。私は人間関係が苦手な生徒たちに、少しばかり寄り添っていきたいと思うようになってきました。グループ学習は他の授業で実施されるですから、せめて私の授業ぐらいは安心して教室にさせたいと思うのです」。

「私には、みんなが笑顔でいられるグループを作る自身はありません。いろいろな人と意見を交換していく力をつけていくことを授業で育てることを否定はしません。でも、私の授業では、ゆっくり1人で考えていいよと見守っていきたくて考えてしまうのです。生徒たちに負担を強いることなくグループを作り、学習を深めていく方法は、私には思いつかないのです」。

本書を読めば、森田氏がさまざまな教材を工夫楽しい授業づくりに長年にわたって取り組んできた教員であることを読者は理解するだろう。そのため、上記のような森田氏の告白は、`授業方法を表面的になぞるだけでよいのか、`という問題提起になっているように思われる。私も、考え続けていきたい。(福岡)

会員消息

2年前に、私が担当した東松山校舎の全学共通科目(地域と教育の関係史)を受講していた学生が、こんどは4年生になって、私が担当する板橋校舎の戦後日本教育史(教職科目)を受講していることに気付き、少しその学生と雑談しました。話によれば、来春から東京都の教員として働くとのこと、私が講義してきたことがどれほど役立ったのか?などは分かりませんが、ぜひ都の教育現場でも澁刺と授業を行ってほしい!といったエールをおくりました。私の担当授業では、よく受講生らに今までに出会った理想とする先生についてのお話をしてもらおうのですが、彼・彼女らがこんどは自分自身が生徒らにとっての有益な先生にぜひなりたい!などと語っている姿は頼もしい限りだと感じました。(谷本)

現在、放送大学で「韓国語Ⅰ」「韓国朝鮮の歴史と文化」の2科目を履修しています。

放送授業(テレビ・ラジオ)なので、学習も試験も全て自宅で完結します。サラリーマンの強い味方です。

これまで放送大学では、「特別支援教育基礎論」をはじめとした特別支援教育関係の科目や「博物館展示論」をはじめとした博物館関係の科目を履修してきました。今回は、一歩踏み込んで苦手な「語学科目」を履修してみました。

「韓国旅行が少しでも楽しくなればいいな」「韓ドラで話していることが少しだけでもわかると良いな」といった単純な理由が学習をはじめたきっかけです。元来、三日坊主の人間なので、頑張っってモチベーションをキープして学習を進めていこうと思います。

また、放送大学ではほとんどの授業科目をオープンコースウェア(OCW)としてインターネット公開しています。公開されている科目は1番組または全15番組とひらきがあります。放送大学の授業を具体的にイメージしたり、興味がある分野の知識を得る…など、様々な利用・活用方法があると思います。ぜひ、一度ご覧ください。(八田)

2024年は、レター投稿ができませんでした。2025年は、研究を進めていきたいです。(山本剛)

2024年は、長期にわたる猛暑、世界的な問題でありながら解決されないパレスチナ問題、大学政策の劣化と思わざるを得ない状況などを見ても、未来に向けて多くの課題があることを改めて感じさせられた年だったように思います。そうした中で研究をしていくこと、そして研究上の話題を狭い仲間内だけで取り上げるのではなく、様々な分野の人たちと共有・交流していくことの重要性を改めて感じています。このニュースレターを通して、「現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求め」とりくみを、来年も、楽しむことを忘れないようにしながら続けていきたいと考えています。

2月2日(日)の13時30分から17時30分ごろまで、神辺会員邸での対面とZoomの併用で、神辺靖光・長本裕子著『花ひらく女学校 女子教育史散策 明治後期編』(成文堂、2021年)に関する研究交流会を開催いたします。対面参加は、場所の関係であと若干名のみ可能という状況ですが、Zoomでしたら、同人はもちろん、読者のみなさんも沢山ご参加いただけます。ご希望の方は、富岡 tomiokamasa@kindai.ac.jp までご一報ください。(富岡)

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。